様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ９ 月　 ９ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０１９４０

研究課題名（和文）第二次世界大戦期植民地兵の研究―植民地世界の戦争・労働・ジェンダー

研究課題名（英文）Studies on Colonial Soldiers during WWII: War, Labour and Gender in the Colonial World

研究代表者
永原　陽子（NAGAHARA, YOKO）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：９０１７２５５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　22,500,000円

研究成果の概要（和文）：アフリカ・アジアの植民地における第二次世界大戦期の戦争動員は、兵士や軍夫としてのほか、労務全般、女性の性的動員など多岐にわたった。軍との関係のあり方は多様であるが、全体的な特徴として、「平時」の労働との連続性を指摘できる。アフリカやインドでは、植民地征服の当初から植民地兵を使うことが一般的であり、地域によっては植民地兵が特定の社会集団を形成した（例:「セポイ」「グルカ兵」「アスカリ」「セネガル兵」）。第二次世界大戦期の動員は、特定の集団を超えて社会全体に及び動員先も遠隔地を含んだ。それゆえ動員の経験は脱植民地化過程に深く影響し、旧宗主国との関係を含むその社会的影響は今日まで残存している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
第二次世界大戦期の植民地兵を包括的に対象とした本研究は、植民地主義の歴史における20世紀中葉を個別植民地における支配政策とは異なる観点から再検討するものであると同時に、大戦を連合国と枢軸国との戦争として見るのとは異なる視点から、すなわち植民地戦争の観点から再検討し、植民地の視点からの20世紀史再考の枠組みを提示した。
この主題は、現在の日本において「慰安婦」問題や「徴用工」問題などの形で政治外交問題化してもいるが、世界各地の同種の歴史についての実証的な研究は、狭隘なナショナリズムを克服し、史実に即して世界諸地域間とりわけ東アジア諸国の友好的な関係を築くための基礎を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：War mobilization in the colonies in African and Asia during WWII includes soldiers and military labourers, labourers in war economy, as well as women meant for sexual use in the military. While their relationship to the military varied, it can be generally said that it stands in continuity with the "peace time" labour. From the very beginning of the colonial conquest, indigenous people were widely used for the military action of the colonial powers. Those who were organized as soldiers often formed a particular social group such as "sipahi," "Gurkha,” "askari," and "Tirailleurs Senegalais." Mobilization during WWII was far beyond the particular social in social and geographical terms. It therefore effected the process and feature of decolonization and its social impact, including the relationship the the former colonial powers, is still to be seen.

研究分野：南部アフリカ史

キーワード：植民地兵　植民地主義　第二次世界大戦　軍夫　労働動員　軍隊と性　戦後補償

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、本研究に先立ち、植民地主義の過去が現代社会にもたらしている課題に向き合うための歴史認識の方法として「植民地責任」論を提唱し、それに基づく実証的な共同研究を進めてきた。その過程で、植民地社会の様々な主体（労働者、農民、女性、兵士など）が植民地体制とどのようにかかわったかを、支配/被支配、加害/被害の二分法を超え、複合的な関係を具体的に明らかにすることが、植民地主義が現在の社会もたらしている遺産を考察する上で重要であるとの認識を得、それに関する研究に取り組むことにした。本研究の直前に行った共同研究「兵士・労働者・女性の植民地間移動にかんする研究」（基盤 A,2011-15 年度）は、植民地主義的な「動員」について比較史的に検討したものであり、時間軸と地域を大きく設定してこの問題の検討を行った。それを受けて、さらに、現代社会に直結する過去であり、わずかとはいえ当事者も現存する第二次世界大戦期に焦点を定めて実証的かつ比較史的な分析を行うことにしたのが本研究である。その研究は、従来とは異なる観点からの第二次世界大戦の研究と位置付けることができる。

２．研究の目的

本研究は、第二次世界大戦を植民地の視点から検討することにより、第二次世界大戦の性格を「連合国対枢軸国」の観点からとは異なる見方で再考するとともに、植民地主義の歴史 における20 世紀を世界戦争との関係で位置づけ直し、脱植民地化過程の研究に新たな視点 からの分析を加えることを目的とする。そのための具体的な分析対象として、「植民地兵」に焦点を定める。「植民地兵」、植民地住民が宗主国により、宗主国の行う戦争のための戦力として動員するものであり、狭義の「兵士」の他に、いわゆる「軍夫」のような、戦争にまつわる雑役を担当する労働者を含む。また、本研究は戦争動員におけるジェンダーの側面を重視しており、その観点からすると、女性に対する「性的動員」も分析の対象に含めないわけにいかない。男性の動員と女性の動員とは不可分の関係にあったからである。対象地域は、アフリカの各植民地のほか、インド、東南アジ ア、東アジアに及ぶ。

広義の「植民地兵」は、多くの植民地で植民地征服期以来の歴史をもつものであり、また場合によっては当該地域社会自身のもつ奴隷制や傭兵等の仕組みとも関連している。本研究では、そのような地域固有の歴史的背景を踏まえつつ、第二次世界大戦という共通の場を設定することにより、同時代的な現象としての植民地的動員の世界史的意義を明らかにし、それにより、従来の第二次世界大戦理解の修正を試みるものでもある。

３．研究の方法

アフリカの各地、インド、東南アジ ア、東アジアの植民地（フォーマルな植民地のみでなく植民地主義的な力関係の下に置かれた地域を含む）につき、第二次世界大戦期の戦争動員の歴史的文脈、動員の具体的様相、そこで生じた諸問題が戦後社会にどのように引き継がれたかを、文書史料、聴き取り調査により明らかにする。研究分担者がそれぞれの担当地域に関する分析結果を持ち寄り、比較史的な分析を行うとともに、地域間、超地域的な連関を明らかにする。

４．研究成果

(1)　長期的な視点からみた第二次世界大戦期の植民地動員

アフリカやインドをはじめ世界の多くの植民地において、第二次世界大戦中の動員は、日本による朝鮮人動員の場合などとは異なり、植民地征服の最初期にまで遡ることのできる　住民の兵士としての利用に起源を見ることができる。それらの中には、インドの「シパー　ヒ」、ネパールの「グルカ兵」、東・東北アフリカの「アスカリ」、西アフリカの「セネガ　ル兵」のように、当該地域にいて特別の社会集団を形成した例も少なくない。植民地

兵は植 民地征服そのものに投入された点で、植民地や潜在的な植民地の住民の間に重大な分断を　作りだすとともに、反面ではある種の「経済機会」を提供するものともなった点で、植民地 社会の歴史を考える上で避けて通ることのできない問題を提起している。本研究では、「植 民地兵」およびそれにまつわる問題を、焦点を第二次世界大戦期に置きつつ、植民地征服の 最初期にまで遡って検討した。

第一次世界大戦期には多くの植民地で、専属的に植民地兵を輩出する特定の社会集団を　超えて大規模な動員が行われた。異なる植民地の出身者がヨーロッパの戦場で邂逅するよ　うな現象もあった。少なくないケースで、「平時」の出稼ぎ労働者募集の仕組みが戦時の兵 士や軍夫の徴募において活用された。

第二次世界大戦では、地域的に見れば必ずしも第一次世界大戦のときより多様な地域出身の植民地兵が動員されたわけではない。しかし、植民地内での動員の様相が「徴兵」やそれに準ずる包括的なものになったケースも多い。宗主国の戦争に動員された多様な社会層　の人々の経験は、その後の植民地社会の政治的な動向に大きな影響を及ぼした。例えばフラ ンスの場合、ナチスドイツからの「解放」を実現した「自由フランス」の兵士の過半数は植 民地のアフリカ兵であった。そのアフリカ兵たちの動員解除後の扱いに対する不満や、大戦末期から大戦後にも植民地の自治に背を向ける当局の姿勢は、独立の前史としてきわめて　重要な意味をもつことになった。

そのような側面は、一般の第二次世界大戦史では触れられることがない。大戦を「連合国対枢軸国」の図式で見ることの問題は、「冷戦」の要素をそこに加えることの必要という点からはつとに指摘されてきた。しかし、世界大戦が「植民地戦争」としての側面を有することは、単に植民地経済の戦争動員ばかりでなく、こうした「人」をめぐる動向に注目したときに明らかである。

同じフランスの例で言うならば、「セネガル兵」は、第二次世界大戦後には、インドシナ戦争、アルジェリア戦争というまさに独立運動を鎮圧するための戦争に動員されることに　なる。そこからは、第二次世界大戦をはさんだ20 世紀史の連続性が見て取られる。

(2)　「植民地」から「植民地主義」へ

　本研究では、前述のように、植民地の観点からみることで 20 世紀史における第二次世界　大戦の意味の相対化、時期区分の再検討の必要を明らかにしたが、その観点からすると、第 二次世界大戦からわずか 5　年後に起こった朝鮮戦争がただちに視野に入ってくる。一般に

「冷戦」の頂点として理解されるこの戦争は、「植民地戦争」の視点を入れることにより、異なった姿を現わす。「国連軍」の一員としてこの戦争に派兵した国々の中でとくに注目されるのが、コロンビアと並んでエチオピアである。エチオピアは植民地ではなかったが、19 世紀末の帝国主義期からイタリアによる侵略を受け、第二次世界大戦に先立つ時期からは　その占領下におかれ、イギリスによって「解放」されるという経験をもつ。そのエチオピア が「冷戦」時代の「熱戦」に西側陣営として加わる選択をした点に、「独立」を維持しなが らも植民地主義的な力関係の中で自らの外交的立場を選ばなくてはならなかった状況を看　て取ることができる。もちろん、この選択には、エチオピア国内の「帝政」をめぐる構造も 関連している。

　エチオピアの参戦は、韓国においては現代に至るまで「友好」の証として記憶されている。本研究で実地調査をおこなった韓国・春川では、それが博物館の形で「記憶文化」化されているのみでなく、当時の激戦地に近い韓国軍基地の中にも顕彰碑として残されている。ここからは、「植民地主義の記憶」の変質・変容に関する考察を深めることができるとともに、エチオピア側におけるこの問題の「記憶」のあり方との非対称性も浮かび上がる。さらには、「植民地戦争としての朝鮮(韓国)戦争」の視点の欠落についても指摘しなくてはならない。

(3)　植民地動員におけるジェンダーの側面　本研究では、「植民地兵」を狭義の、すなわち　宗主国の軍による戦闘員としての植民地住

民の動員のみならず、軍にまつわる労役の担い手としての「軍夫」、また軍の管轄下にはないが戦時経済のために強化された労働動員などの広がりの中でとらえることを重視した。なぜならば、植民地の文脈においてはそれらの境界が曖昧であり、そもそも植民地においては「平時」はしばしば「戦時」であり、日常的に「戦時」にも等しい動員が行われ、その延　長

線上において大戦期の戦時動員が行われたからである。そのような「労働」の実態を重視 するとき、そこからは必然的に、労働におけるジェンダーの側面が浮かび上がってくる。そ こで、「兵士」や「軍夫」の動員が女性たちの労働環境・労働内容を変化させた様子につい ての分析検討を行った。

同時に、しばしば戦時の「普遍的」現象ともされる女性の性的動員についても、「戦時」にとどまらず、むしろ植民地の「平時」にもみられた性的搾取の構造の延長線上にあることを明らかにした。アジアの場合には、日本軍による「慰安婦」制度がただちに想起されるが、 フランス軍の「野戦軍売春所」(BMC)もその性格はきわめて類似していることが明らかにな った。そこからは、単に植民地の女性が性的に動員されるという事実のみならず、植民地間 の序列が構造化されることで、この制度が維持されたことがわかる。それは、戦時に作られ た構造ではなく、それ以前からの植民地体制の中で築かれたものである。そこから、日本軍 や仏軍のように制度化された性動員の体制をもつケースのみでなく、その他の「帝国」にお いても、制度化されない形で性動員と性暴力の実態があったことが理解される。

(4) 戦後補償・植民地責任 植民地兵やそれに接続した労働動員、性的動員の問題は、現在の日本/東アジアにおいて

は、「慰安婦」問題や「徴用工」問題として、政治外交上のイッシューとされることが多い。 しかし、それは東アジアのみの現象ではなく、たとえば植民地兵の年金差別の問題は、イギ リスやフランスにおいてもごく最近に至るまで解決されず、女性の性的動員に至っては、そ の史実の認知すら覚束ないことからわかるとおり、植民地主義の「過去」をめぐる歴史認識 の問題として、旧帝国が共通に抱える問題である。狭隘なナショナリズムの感情は、本研究 が明らかにしたようなアフリカ・アジアの様々な植民地における戦争と動員をめぐる多様な史実やその比較史的検討を妨げてきた。そのことがさらに、問題の解決を遅らせていると言える。

21 世紀に入り、植民地主義下で行われた「不正義」の事実を直視・認知し、史実を共有 することで「正義」の回復を求める動きは世界の大きな潮流となっている。本研究が明らか にした第二次世界大戦を中心とする 20 世紀の植民地体制下での戦争と動員に関する史実 は、そのような動きがなぜ今日の世界の潮流となっているのかを理解し、日本が直面してい るいわゆる「歴史問題」を解決するための知的基盤を提供するものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Momoka MAKI	４．巻 36
２．論文標題 Women and the Armed Struggle in Tigray, Ethiopia	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies	６．最初と最後の頁 85-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Namba Chizuru	４．巻 32
２．論文標題 Between Colony and Metropole: Repatriation of Vietnamese Workers from Post-war France	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Moussons	６．最初と最後の頁 109-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/moussons.4430	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 難波ちづる	４．巻 84巻2号
２．論文標題 インドシナにおけるフランス植民地支配の終焉ーゴム・プランテーションにおける 労働問題を中心に	５．発行年 2018年
３．雑誌名 社会経済史学	６．最初と最後の頁 77-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上杉妙子	４．巻 197
２．論文標題 海外在住ネパール人協会とNCC日本	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Migrants Network　（エムネットMnet）	６．最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永原陽子	4．巻 第5号
2．論文標題 20世紀初期南部アフリカの人種化とジェンダー―南ア戦争期の'black peril'と'white peril'―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 女性とジェンダーの歴史	6．最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoji Matsuda	4．巻 February 12
2．論文標題 A Genesis of Street Communality: With Special Reference to the Political Culture of Street Violence in Nairobi	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Diogenes (Online)	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/0392192117740035	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 粟屋利江	4．巻 第959号
2．論文標題 神話的歴史（mytho-history）―インドのダリトの事例を中心に	5．発行年 2017年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 62-68，79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 MIZOBE Yasu'o	4．巻 第10巻第1号
2．論文標題 An Overview of Japanese-African Relations and the 1960s Campaigns against the Atomic Bomb: Based on an Analysis of the 1962 Accra Assembly of the World Without the Bomb	5．発行年 2018年
3．雑誌名 明治大学国際日本学研究	6．最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 上杉妙子	4．巻 第197号
2．論文標題 海外在住ネパール人協会とNCC日本	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Mネット	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 眞城百華	4．巻 --
2．論文標題 内戦支援からNGOへ－ティグライ女性協会の活動を中心にー	5．発行年 2017年
3．雑誌名 科研報告書『NGOとアフリカの市民社会』（科研報告書、基盤研究B(25300049)）、研究代表者：大阪府立大学・宮脇幸生教授	6．最初と最後の頁 60-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 眞城百華	4．巻 第3号
2．論文標題 地中海を渡るアフリカ難民の検討－アフリカの角の事例から－	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『多文化社会研究』（長崎大学多文化社会学部紀要）	6．最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 網中昭世	4．巻 No.55
2．論文標題 モザンビークにおける政治暴力発生のメカニズム－除隊兵士と野党の役割ー	5．発行年 2017年
3．雑誌名 アフリカレポート	6．最初と最後の頁 62-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Uesugi, Taeko	4．巻 21(1)
2．論文標題 “Seika Sato. 2015. Conversing with the Yolmo Women: An Anthropology of Life/Story in Nepal (Kanojotachitonokaiwa: Neparuyorumoshakainiokeruraifu/storiino jinruigaku). Tokyo: Sangensha.”	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Studies in Nepali History and Society	6．最初と最後の頁 219-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 MIZOBE Yasu'o	4．巻 第９巻、第1号
2．論文標題 History of Intellectual Relations between Africa and Japan During the Interwar Period as Seen Through Takehiko Kojima’s African Experience of 1936	5．発行年 2017年
3．雑誌名 明治大学国際日本学研究	6．最初と最後の頁 63-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 溝辺泰雄	4．巻 第80冊
2．論文標題 植民地前半期に構想された「アフリカ独自の近代化」における「発展」概念の史的考察：イギリス領ゴールドコースト(現ガーナ)の現地エリートS.R.B.アッター=アフマの思想から	5．発行年 2017年
3．雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6．最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoji Matsuda	4．巻 251-252
2．論文標題 Communaute' et violence de rue a' Nairobi	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Dioge'ne	6．最初と最後の頁 103-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoji Matsuda	4．巻 24
2．論文標題 Creativity of Narrative of Suffering of the Korean A-Bomb Survivors: How Reconciliation and Redress could be achieved?	5．発行年 2016年
3．雑誌名 京都社会学年報	6．最初と最後の頁 1‐16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木茂	4．巻 250
2．論文標題 ブラジルにおけるスポーツの政治学	5．発行年 2016年
3．雑誌名 アジ研ワールドトレンド	6．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計49件（うち招待講演　13件／うち国際学会　19件）

1．発表者名 Momoka MAKI
2．発表標題 Women Liberation in Tigray, Ethiopia: Experiences under a situation of Civil War
3．学会等名 20th International Conference on Ethiopian Studies, Mekele University, Ethiopia（国際学会）
4．発表年 2018年～2019年

1．発表者名 Taeko Uesugi
2．発表標題 Masculinity of Single/Married Soldiers: The Cases of British Soldiers in Colonial India in 19th Century
3．学会等名 Workshop: Families, States and Militaries: Changes in Relations and Conditions, Shiga University.（国際学会）
4．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 上杉妙子
２．発表標題 国境をまたぐコーポラティズム―在外ネパール人協会とネパール政府
３．学会等名 2018年度HINDAS第3回研究集会、広島大学、現代インド研究センター
４．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 永原陽子
２．発表標題 ジェンダーと史料から考える『植民地責任』―マウマウ訴訟とその後―
３．学会等名 国際基督教大学ジェンダー研究センター『「過去の克服」とジェンダー・セクシュアリティ研究』（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yoko Nagahara
２．発表標題 Colonial Soldiers/Laborers in Southern Africa during WWI: Transnationality and Continuity in Mobilization
３．学会等名 DAAD-JSPS Project: Entangled Pasts in the Global Present: Gender, Labor & Citizenship, Project Kick-Off Workshop: Labor and Citizenship in the Twentieth Century
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yoko Nagahara
２．発表標題 'Tradition' and Gender in Northern Namibia
３．学会等名 DAAD-JSPS Project: Entangled Pasts in the Global Present: Gender, Labor & Citizenship, Gender and Race Workshop
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yoko Nagahara
２．発表標題 Opening Remarks
３．学会等名 International Conference on Colonial Mobilization in Africa and Asia during the Second World War: Soldiers, Labourers and Women（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motoji Matsuda
２．発表標題 Opening Remarks
３．学会等名 The 7th African Potentials Forum at Rhodes University, South Africa（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Motoji Matsuda
２．発表標題 Opening Remarks
３．学会等名 Towards Collaboration of East Asian Anthropological Associations
４．発表年 2017年

１．発表者名 Motoji Matsuda
２．発表標題 Anthropological Practices and Intervention Problem: Between Academism and Activism
３．学会等名 Cultural Anthropology Forum, Hanyang University, Korea
４．発表年 2018年

１．発表者名 Bhatte Pallavi Kamlakar
２．発表標題 A Historical Examination of the Greater East Asia War and British India
３．学会等名 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies(EAJS 2017)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Rohan D'Souza and Bhatte Pallavi Kamlakar
２．発表標題 Re-imagining the North East in India: Did Geography Sidestep History in Vision (2020)?
３．学会等名 North-East India & Japan Cultural Symposium
４．発表年 2018年

１．発表者名 Bhatte Pallavi Kamlakar
２．発表標題 Testimonies and the Second World War: Reflections on how Japanese Soldiers 'remember' the Indian National Army
３．学会等名 International Conference on Colonial Mobilization in Africa and Asia during the Second World War: Soldiers, Labourers and Women（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 MIZOBE Yasu'o
２．発表標題 Reconsidering the 1960s campaigns against atomic and hydrogen bombs in Africa and Japan through an analysis of the Accra assembly for the world without bombs in 1962
３．学会等名 The 2nd Biennial Conference of African Studies Association of Africa (ASAA)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 MIZOBE Yasu'o
２．発表標題 How Did the Japanese Describe Unintended Encounters with African Soldiers During World War II?: A Preliminary Report Based on Contemporary Writings and Memoirs Written in Japanese
３．学会等名 International Conference on Colonial Mobilization in Africa and Asia during the Second World War: Soldiers, Labourers and Women（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Uesugi, T
２．発表標題 Corporatism beyond National Boundaries? The transnational civil society of Nepalese emigrants and the Nepalese government
３．学会等名 A Joint CASCA and IUAES Conference/Inter-congress, University of Ottawa, Canada
４．発表年 2017年

１．発表者名 Uesugi, T
２．発表標題 Reexamining the Employment of Gurkha as a Specific Case of the Informal British Empire
３．学会等名 International Conference on Colonial Mobilization in Africa and Asia during the Second World War: soldiers, labourers and women（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 今泉裕美子
２．発表標題 Mobilization and Perspectives by the Japanese Military on Japanese and Native Civilians during the Pacific War in Saipan and Tinian
３．学会等名 3rd Marianas History Conference-Milestones in Mariana History, Fiesta Resort&Spa Saipan（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 今泉裕美子
２．発表標題 米軍占領下南洋群島の朝鮮人―1944年～1945年を中心に
３．学会等名 第2回啓明大学校国境学研究所国際学術会議「近代アジアに於ける経済国 境とヒトの移動」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Momoka MAKI
２．発表標題 Between Occupation and Resistance: The Experiences of Ethiopian Soldiers under Italian Colonial Rule
３．学会等名 International Conference of Colonial Mobilization in African and Asia During the Second World War: Soldiers, Labourers and Women（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 網中昭世
２．発表標題 アフリカにおける民主化の行方―モザンビークにおける政治暴力発生のメカニズム―
３．学会等名 京都大学アフリカ地域研究資料センター主催アフリカ地域研究会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 網中昭世
２．発表標題 グローバル化への合流とナショナリズムの醸成ー南アフリカにおける移民排斥とその反動
３．学会等名 連続公開セミナー：逆流し始めたグローバリゼーション（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Aminaka, Akiyo
２．発表標題 Developmentalism flew over the Ideologies: Reproducing 'kibbutz' in colonial and post-colonial Lusophone Africa
３．学会等名 関西大学経済学部アジア・アフリカ研究グループ主催The Fourth International Symposium "Africa and Asia Entanglements in Past and Present : Mainstreaming Africa in the Discourse of 'Development' "（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Aminaka, Akiyo
２．発表標題 Developmentalism flew over the Ideologies: Reproducing 'kibbutz' in colonial and post-colonial Lusophone Africa
３．学会等名 リスボン大学歴史研究所主催国際会議（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Aminaka, Akiyo
２．発表標題 Developmentalism flew over the Ideologies: Reproducing 'kibbutz' in Africa
３．学会等名 ハーバード大学アフリカ研究所主催国際会議　於中国上海（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Aminaka, Akiyo
２．発表標題 Signs of Spontaneous Democratization in Mozambique: Special Focus on the Opposition Party and its Ex-Soldiers Grahamstown, South Africa
３．学会等名 京都大学（基盤研究(S) 16H06318「「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服：人類の未来を展望する総合的地域研究」）国際フォーラム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Aminaka, Akiyo
２．発表標題 Protecting the Vestige of Maritime Empire in the Post-War World: Reinforced Mobilization of African Soldiers in Portuguese Colonies
３．学会等名 International Conference of Colonial Mobilization in African and Asia During the Second World War: Soldiers, Labourers and Women（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木茂
２．発表標題 「現代史と映像」―東京外国語大学における現代史教育の試みと課題
３．学会等名 シンポジウム「大学での学び：全ての授業に近現代史からの照射を！」（主催：「全ての大学に教養科目「戦後世界史と日本」を！市民ネットワーク」）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木茂
２．発表標題 東京外大「世界史」入試問題と歴史用語精選
３．学会等名 科研費「高大連携に基づく歴史教育の実践的研究」（基盤B、研究代表者：金井光太朗、2016~2018年度）2017年度第２回研究会　「入試問題を歴史教育に活かす」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 永原陽子
２．発表標題 南アフリカの"Rhohes Must Fall"運動とその後
３．学会等名 DOSC同志社大学植民地主義研究会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 永原陽子
２．発表標題 アフリカ史・アフリカ地域史研究のアフリカ化と植民地史料
３．学会等名 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」
４．発表年 2016年

１．発表者名 Yoko Nagahara
２．発表標題 Land and “Tradition”: Authorities, Border and Gender in Namibia
３．学会等名 Land, the State and Decolonizing the Agrarian Structure in Africa-- A colloquium in Honour of Professor Sam Moyo（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 永原陽子
２．発表標題 20 世紀初期南部アフリカ社会の人種化とジェンダー ―南ア戦争期の"black peril"と"white peril"
３．学会等名 イギリス女性史研究会・第 27 回研究会　シンポジウム 「植民地戦争における セクシュアリティとジェンダー ――帝国だったイギリスの過去を問い直す――」（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 眞城百華
２．発表標題 エチオピア・ティグライ人民解放戦線の女性兵士：武力闘争と女性解放
３．学会等名 『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服：人類の未来を展望する総合的地域研究」（科研基盤(S)）ジェンダー・セクシュアリティ班・シンポジウム『アフリカにおける女性兵士―エチオピアとウガンダの事例から』
４．発表年 2017年

１．発表者名 今泉裕美子
２．発表標題 パラオ諸島における引揚げー日本軍と米軍の二つの占領を生きた人々
３．学会等名 政治経済学・経済史学会秋季大会「パネル・ディスカッションA　1940年代日本帝国主義権力の崩壊と人の移動ー敗戦前後の在留「日本人」を中心に」
４．発表年 2016年

１．発表者名 上杉妙子
２．発表標題 越領域的国民国家の国家統治と市民権概念―在外ネパール人協会の『ネパール市民権の継続』運動―
３．学会等名 日本南アジア学会第29回全国大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 上杉妙子
２．発表標題 二重市民権をめぐる移出民と送出国政府の交渉―在外ネパール人協会の「ネパール市民権継続」運動を例として―」
３．学会等名 成蹊大学アジア太平洋研究センター・研究プロジェクト「グローバル・ジャスティスの模索とローカリティ：グローバルとローカルの出会う現場から」研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 UESUGI Taeko
２．発表標題 "Single" in the Cases of British Soldiers in Colonial India during 19th Century.
３．学会等名 Symposium: Toward the Co-existence of Various ‘Single’ in the Global Societies. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 UESUGI Taeko
２．発表標題 Enlarged corporatism beyond national boundaries: Nepalis' transnational civil society and the origin country.
３．学会等名 JSPS Program, Advanced Research Networks, Research on the Public Policies on Migration, Multiculturalization and Welfare for the Regeneration of Communities in European, Asian and Japanese Societies.（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 MIZOBE Yasu'o
２．発表標題 Japanese-African Relations and the 1960s Campaigns against Atomic and Hydrogen Bombs: Analysing the 1962 Accra Conference’s Impact
３．学会等名 日本アフリカ学会第53回学術大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 溝辺泰雄
２．発表標題 「発展」のために「後退」する：初期植民地期英領ゴールドコースト(現ガーナ)の現地エリートが構想した「知的退歩」運動
３．学会等名 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服：人類の未来を展望する総合的地域研究(教育・社会班第3回研究会)
４．発表年 2017年

１．発表者名 溝辺泰雄
２．発表標題 アフリカンナショナリズム及びパンアフリカニズム関連史料調査についての予備的報告：19世紀後半から1960年代までのガーナ(英領ゴールドコースト)メディアの事例から
３．学会等名 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」2016年度第3回研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 松田素二
２．発表標題 抵抗論の現在
３．学会等名 日本文化人類学会次世代育成セミナー東日本会場
４．発表年 2016年

１．発表者名 Motoji Matsuda
２．発表標題 Opening Remarks from the President
３．学会等名 The 3rd JASCA International Symposium:The Internationalization of Japanese Cultural Anthropology and the Attempt to Strengthen the Overseas Dissemination of Information
４．発表年 2016年

１．発表者名 松田素二
２．発表標題 探検・科学・異文化理解――ヘディンの軌跡を通して考える
３．学会等名 文学研究科・文学部 公開シンポジウム: 近代日本における学術と芸術の邂逅 ―ヘディンのチベット探検と京都帝国大学訪問―
４．発表年 2016年

１．発表者名 Motoji Matsuda
２．発表標題 African Potentials to Develop Alternative Methods of Addressing Global Issues
３．学会等名 THE 6th. AFRICA FORUM KAMPALA
４．発表年 2016年

１．発表者名 松田素二
２．発表標題 地域に学ぶプロジェクトの20年－大学院生による地域調査実習を通して
３．学会等名 学　会　等　名 竹沢尚一郎教授　退職記念シンポジウム「地域にとって豊かさとは何か？」
４．発表年 2017年

１．発表者名 粟屋利江
２．発表標題 インドにおける近代史研究の地平から
３．学会等名 政経史学会総合研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 粟屋利江
２．発表標題 第二次世界大戦とインド兵をめぐる研究動向
３．学会等名 「科研基盤Ａ　第二次世界大戦期植民地兵の研究」研究会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計30件

１．著者名 永原陽子	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 347
３．書名 人々がつなぐ世界史（ミネルヴァ世界史叢書第4巻）	

1．著者名 Astuko Fukuura and Eyal Ben-Ari	4．発行年 2019年
2．出版社 Hikone: Shiga University, The Institute for Economic and Business Research (滋賀大学経済経営研究所)	5．総ページ数 169
3．書名 2019 Families, States and Militaries: Changes in Relations and Conditions (Taeko Uesugi ‘Masculinity of Single/Married Soldiers: The Cases of British Soldiers in Colonial India in the 19th Century,’ pp. 135-144)	

1．著者名 長崎暢子	4．発行年 2019年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 632
3．書名 山川世界歴史体系　南アジア史　4　近代・現代（粟屋利江担当部分「第一次世界大戦から独立までの社会・文化」pp.177-200）	

1．著者名 長崎暢子	4．発行年 2019年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 632
3．書名 山川世界歴史体系　南アジア史　4　近代・現代（粟屋利江担当部分「ジェンダー」pp.317-325）	

1．著者名 李成煥、木村健二、宮本正明	4．発行年 2019年
2．出版社 日本経済評論社	5．総ページ数 259
3．書名 近代朝鮮の境界 を越えた人びと（今泉裕美子担当部分「 第5章　豊南産業株式会社による「南洋農業移民」－朝鮮総督府との交渉を中心に 」pp.157-164）	

1．著者名 松沢裕作編	4．発行年 2019年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 312（難波担当部分：237-274）
3．書名 森林と権力の比較史（難波ちづる担当部分 「仏領インドシナにおける植民地支配と森林」pp.）	

1．著者名 Guampedia	4．発行年 2018年
2．出版社 E-publication(http://issuu.com/guampedia/docs/mhc_iii_2017_3)	5．総ページ数 212
3．書名 The 3rd Marianas History Conference,One Archipelago, Many Stories:Milestones in Marianas History (Yumiko IMAIZUMI, "Mobilization and Perspectives by the Japanese Army on Japanese Civilians and Local People during the Pacific War in Saipan and Tinian", pp. 1-20)	

1．著者名 歴史学研究会	4．発行年 2017年
2．出版社 績文堂出版	5．総ページ数 303
3．書名 新自由主義時代の歴史学 ： 第4次現代歴史学の成果と課題 1（永原担当部分「植民地責任論」pp.79-94）	

1．著者名 中野　敏男、板垣　竜太、金　昌禄、岡本　有佳、金　富子	4．発行年 2017年
2．出版社 大月書店	5．総ページ数 312
3．書名 「慰安婦」問題と未来への責任（永原担当部分「マウマウ訴訟と『舞い込んだ文書群』」pp.254-257）	

１．著者名 渡辺 公三、石田 智恵、冨田 敬大	４．発行年 2017年
２．出版社 以文社	５．総ページ数 664
３．書名 異貌の同時代（松田担当部分「異なるものへの不寛容はいかにして乗り越えられるのかーレヴィ＝ストロースを手掛かりにして」pp.495-524）	

１．著者名 田中 和子、佐藤 兼永	４．発行年 2018年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 278
３．書名 探検家ヘディンと京都大学　（松田担当部分「探検・科学・異文化理解―ヘディンの軌跡を通して考える」pp. 205-216）	

１．著者名 Italo Pardo and Giuliana B. Prato (Eds.)	４．発行年 2017年
２．出版社 Palgrave Macmillan, London	５．総ページ数 XIX, 575
３．書名 The Palgrave Handbook of Urban Ethnography (Motoji Matsuda ”Two Types of Community Organization in Urban Africa” pp.369-385)	

１．著者名 歴史学研究会	４．発行年 2017年
２．出版社 績文堂出版	５．総ページ数 IX, 305
３．書名 世界史像の再構成 ： 第4次現代歴史学の成果と課題 2　（鈴木担当部分「グローバル格差と地域社会―ラテンアメリカの事例から」pp. 289-303）	

1．著者名 納家　政嗣、永野　隆行	4．発行年 2017年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 308
3．書名 帝国の遺産と現代国際関係　（眞城担当部分「北東アフリカにおける脱植民地化と国際秩序の再編：イタリア植民地処理と地域対立の萌芽」pp.201-226）	

1．著者名 宮脇幸生編	4．発行年 2018年
2．出版社 大阪公立大学出版会	5．総ページ数 276
3．書名 国家支配と民衆の力―エチオピアにおける国家・NGO・草の根社会―（眞城担当部分「内戦支援からNGOへ―ティグライ女性協会の活動を中心に―」pp．104-139）	

1．著者名 歴史学研究会	4．発行年 2017年
2．出版社 績文堂出版	5．総ページ数 303
3．書名 新自由主義時代の歴史学 ： 第4次現代歴史学の成果と課題 1　（栗屋担当部分「サバルタン・スタディーズの射程」pp．175-190）	

1．著者名 粟屋利江、井上貴子編	4．発行年 2018年
2．出版社 東京外国語大学出版会ページ	5．総ページ数 333
3．書名 インド　ジェンダー研究ハンドブック	

1．著者名 武内進一	4．発行年 2017年
2．出版社 アジア経済研究所	5．総ページ数 315
3．書名 現代アフリカの土地と権力　（綱中担当部分「モザンビークにおける土地法の運用と政治力学」pp.201-229）	

1．著者名 白石昌也、難波ちづる、他　（共訳）	4．発行年 2017年
2．出版社 早稲田大学アジア太平洋研究センター	5．総ページ数 94
3．書名 外交官横山正幸のメモワール―バオ・ダイ朝廷政府の最高顧問が見た1945年のベトナム	

1．著者名 Refslund Sorensen and Eyal Ben-Ari (eds.)	4．発行年 2018年
2．出版社 Berghahn	5．総ページ数 印刷中
3．書名 Rethinking Civil-Military Relations: Anthropological Perspectives (tentative title) (Uesugi, T, ”After Taking off the Combat Dress of the Foreign Army: Civil-military Entanglement Observed in Citizenship Negotiation by British Gurkha Veterans”)	

1．著者名 世界史叢書編集委員会＜秋田茂・永原陽子・羽田正・南塚信吾・三宅明正・桃木至朗＞	4．発行年 2016年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 456
3．書名 世界史叢書総論　「世界史」の世界史（永原担当分上記著者と共著「総論　われわれが目指す世界史」pp.391-427.）	

1．著者名 石原美奈子編著	4．発行年 2017年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 302
3．書名 現代エチオピアの女たち：社会変化とジェンダーをめぐる民族誌（眞城担当分「戦う女性たち―ティグライ人民解放戦線と女性」pp.146-179.）	

1．著者名 木田剛・竹内幸雄編著	4．発行年 2017年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 392
3．書名 安定を模索するアフリカ（網中担当分「南アフリカ―『虹の国への道のり』pp．292-310）	

1．著者名 今泉裕美子・木村健二・柳沢遊編著	4．発行年 2016年
2．出版社 日本経済評論社	5．総ページ数 387
3．書名 日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究―国際関係と地域の視点から（今泉担当分）「序章　近年の「引揚げ」研究の視点と本書の課題」pp．1-28，「パラオ諸島をめぐる民間人の「引揚げ」-第二次世界大戦中の兵站基地化から米軍占領下までを 中心に」pp．127-188.）	

1．著者名 名和克郎編	4．発行年 2017年
2．出版社 三元社	5．総ページ数 592
3．書名 体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相―言説政治・社会実践・生活世界（上杉担当分「多重市民権をめぐる交渉と市民権の再構成―在外ネパール人協会の『ネパール市民権の継続』運動―」pp．485-519）	

1．著者名 志村真幸（編）	4．発行年 2016年
2．出版社 共和国	5．総ページ数 513
3．書名 異端者たちのイギリス史（Bhatte Pallavi担当分「マダン・ラール・ディングラによるウィリアム・カーゾン・ワイリー暗殺事件とその影響」pp. 435-437）	

1．著者名 Gebre Yntiso, Itaru Ohta & Motoji MatsudaMotoji Matsuda (Eds.)	4．発行年 2017年
2．出版社 Langaa RPCIG	5．総ページ数 432
3．書名 African Virtues in the Pursuit of Conviviality: Exploring Local Solutions in Light of Global Prescriptions	

1．著者名 Gebre Yntiso, Itaru Ohta & Motoji MatsudaMotoji Matsuda (Eds.)	4．発行年 2017年
2．出版社 Langaa RPCIG	5．総ページ数 432
3．書名 African Virtues in the Pursuit of Conviviality: Exploring Local Solutions in Light of Global Prescriptions(Matsuda:Introduction: Achieving Peace and Coexistence through African Potentials, pp. 3-37)	

1．著者名 Gebre Yntiso, Itaru Ohta & Motoji MatsudaMotoji Matsuda (Eds.)	4．発行年 2017年
2．出版社 Langaa RPCIG	5．総ページ数 432
3．書名 African Virtues in the Pursuit of Conviviality: Exploring Local Solutions in Light of Global Prescriptions(Matsuda: Everyday Knowledge and Practices to Prevent Conflict: How Community Policing domesticated in Contemporary Kenya, pp. 275-308)	

１．著者名 Masaya Shiraishi, Nguyen Van Khanh & Bruce M.　Lockhart eds.	４．発行年 2017年
２．出版社 Waseda University Institue of Asia-Pacific Studies	５．総ページ数 333
３．書名 Vietnam-Indochina-Japan Relations during the Second World War: Documents and Interpretations(Chizuru Namba, “France’s Attempts to Face its Past over its Partnership with the Japanese in the Control of Indochina with a Focus on the Process of Japanese War Crimes Trials” pp.143-154)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	粟屋　利江 (Awaya Toshie) (00201905)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	Ｂｈａｔｔｅ　Ｐａｌｌａｖｉ (Bhatte Pallavi) (30761366)	京都大学・人間・環境学研究科・特定講師 (14301)	
研究分担者	松田　素二 (Matsuda Tomoji) (50173852)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	上杉　妙子 (Uesugi Taeko) (90260116)	専修大学・文学部・兼任講師 (32634)	
研究分担者	網中　昭世 (Aminaka Akiyo) (20512677)	独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・研究企画部・海外研究員 (82512)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	眞城　百華 (Maki Momoka) (30459309)	上智大学・総合グローバル学部・准教授 (32621)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
International conference on Colonial Mobilization in Africa and Asia during the Second World War: soldiers, labourers and women Kyoto	2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関